

執筆者紹介

つねき けんたろう
恒木健太郎 経済学部准教授

ふくい しんいち
福井 紳一 駿台予備学校講師・早稲田大学アジア太平洋研究センター特別センター員

しら い きょう
白井 聡 京都精華大学人文学部講師

〈編集後記〉

今号は、現在本研究所において構築が進められている山田盛太郎文庫にも関わり、2018年9月に実施された公開研究会「戦中史から国体論へ-現代日本の古層」をベースとして、恒木健太郎、福井紳一、白井聡の3氏が報告に基づき再構成をおこなった論考である。

日本の「特殊」な政治経済状況を捉えるうえで、「講座派」の代表的研究者であり、本研究所の初代所長でもあった山田盛太郎の問題意識や方法論を手がかりとして、恒木氏が論点を提起、福井、白井両氏がそれぞれ近年ものされた著作の議論を敷衍しつつ応答していく内容は非常に読み応えがある。

日本政府がテコ入れするような明治時代を「顕彰する」動きがある一方で、学術・言論の各方面においても日本の近代を今一度問い直す機運が生じている。それがさらに高められていくことは一層必要なことであろう。著者たちの問題意識と研究もそのような動きに通じているとみることもできる。

ところで、山田盛太郎の研究の方法に関わっては、実証分析あるいは現場の実態を非常に重視していたといわれていることを付言しておきたい。その点、『日本資本主義分析』の鉄鋼業の分析・叙述に関わり、山田が参照していた「本邦製鉄労働事情概説」の著者・橋本能保利については、江口英一編『日本社会調査の水脈 - そのパイオニアたちを求めて』（法律文化社）における加藤佑治執筆章に詳しい。今号の白井氏の論考の終盤に、「実体」還元主義の陥穽に対して、「実証的領域」や「現場」からの知見に基づく構造把握の重要性が述べられている。まさに山田盛太郎の方法の特長にもつながる議論として読むことができる。手前味噌になるが、専修大学社会科学研究所が長年継続している実態調査の「スピリット」につながるようにも思われる。

(T.K.)

2018年12月20日発行

〒214-8580

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

The Institute for Social Science, Senshu University, Tokyo/Kawasaki, Japan

(発行者) 宮 寄 晃 臣

製 作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前 2-10-2 電話 (03)3404-2561
